

「福祉の敗北」とスティグマ

武岡 暢*

Toru TAKEOKA

'Welfare's Defeat' and Stigma

「社会保障／福祉の敗北」という言説がある。これは例えば生活保護を受給するよりもあえて軽犯罪によって収監されることを選択する人びとや、さまざまな制度のはざまでセックスワークを選択する人びとといったように、福祉制度が意図通りにうまく機能せず、かえって制度の裏をかくような選択や自助努力が選好される現象を指している。

近年この「敗北」という表現が人口に膾炙したきっかけは、NHKのクローズアップ現代で2014年1月27日に放映された「あしたが見えない～深刻化する“若年女性”の貧困～」であろう。この番組では「働く世代の単身女性の1/3が年収114万円未満」であるという統計や、中でもシングルマザーにおいて貧困率が極めて高くなっているという推計が紹介され、従業員向けに寮を用意したり保育所と提携している「風俗店」で働く女性たちへのインタビューが続く。すぐに利用できるとは限らない一般の保育所や生活保護に比して、即座に必要なサービスと現金が手に入れられるセックスワークの優位が番組では口々に語られ、女性の生活支援組織の理事であり臨床心理士の鈴木晶子が番組のゲストとして以下のようにコメントした。

性産業というのが、職と共に住宅であるとか、夜間や病児も含めた保育まで、しっかりとしたセーフティーネットとなっている。実際に公的なところで、こんなに包括的なサービスが受けられるかという、そうではないというのが現実ではないか。これは社会保障の敗北といえますか、性産業の方がしっかりと彼女たちを支えられているという現実だと思う(村石 2014: 120)

ここには研究されるべきいくつかの論点を見出すことができる。第一に、福祉受給に対してセックスワークを選好するような人びとの選択が、現実どの程度生起しているのか——このことが改めて経験的な調査の俎上に載せられてよい。第二に、第一の

論点とも関連して、そうした選択が単なる生活の手立てとしての利便性や利用可能性availabilityの問題に還元できるものなのか、もしくはそれとは別に(それに加えて?)福祉制度とセックスワークに異なる意味が付与されているのか、これが問われなければならない。

もし利用可能性の問題に還元できるのであれば、さまざまな制度や組織、運用の改善——ワンストップサービスの整備や「水際作戦」の抑止、ケースワーカーの増配等々——によって、福祉がセックスワークに「勝利」を収める道すじが見えてくる。しかしセックスワークの選好がそうした利便性には還元できず、むしろ意味づけや価値体系上の差異の上でのことなのだとすれば、単に社会保障制度を拡充、改善したとしても、福祉は「敗北」を脱することができないかも知れない。社会保障とセックスワークが機能的に等価(どころか後者の優位!)であるとする状況認識から、社会保障制度の欠陥を批判するNHKの番組制作者の構えにおいては、そうした機能的等価性においてこそ浮かび上がるはずの、人びとがそれら代替選択肢を経験する、その質の隔たりは見逃されている。

<福祉受給のスティグマ化>と<セックスワークのスティグマ化>という古典的なテーマがここで出会う。それらはいかなる価値意識や認識枠組と関連して、人びとの選択に影響を与えるのだろうか。このことが、コロナ禍による生活困窮が改めてセックスワークの選好を生んだ今日において、改めて問い直されるべきであろう。

文献

村石多佳子, 2014, 「セーフティーネットとしての「風俗」NHK「女性の貧困」取材班, 『女性たちの貧困——“新たな連鎖”の衝撃』幻冬舎, 91-121.

* 立命館大学 産業社会学部 現代社会学科 准教授